



十字路

1960. 9~10

上映映画解説

No. 67

十字路 無声6巻

衣笠映画聯盟1928年作

脚本・監督……………衣笠貞之助

撮影……………杉山 公平

装置……………平凡二(友成用三)

配 役

姉……………千早 晶子

弟……………阪東寿之助

二階を貸している男……………関 操

十手を拾った男……………相馬 一平

女を売る婆……………中川 芳江

矢場の女……………小川 雪子

間違えられる女……………二条 照子

喧嘩の相手……………小川若一郎

(1928年5月11日新宿武蔵野館で封切)

「十字路」のこと

衣笠貞之助

この映画は、大正15年に結成した衣笠映画聯盟製作、松竹配給作品中の一つで、昭和3年2月頃に製作したものです。

昭和3年と言いますと、金融恐慌のさなかで倒るところに失業者が溢れ、やがて戦争へ日本をかりたてた軍閥内閣が、3・15検挙や特高警察設置によって、国民の自由を剝奪し始めた時代でした。映画も、勿論検閲を強化されましたが、まだ日本映画は年代も若く、積極的だったので、抑圧された大衆の鬱憤を晴らす代行者として、よく小市民生活の感情をとり入れ、中でも時代劇は解放感を与える好個の娯楽として、急速に発展、所謂剣劇華やかなる時代を現出したのであります。ところが、この発展は間もなく常設館から製作者側へ、一作品の映画の中で、最低二巻位のチャンバラを入れるように要求され、内容軽視の傾向になって来

ましたので、これに飽き足りない人々から、映画の芸術性を高める為にも、時代劇から剣を奪えと言う声が始まりました。「十字路」はその試みの一つとして作られたものです。従って、時代劇らしい筋も派手な見せ場もなく、町の片隅に生きる貧しい姉弟の愛情を主題として、その「表現」のみに力点を置く描法をとっています。今日これを見ますと、主題の追及も演出その他も生硬未熟、それにトーキーと違って、弁士の解説と音楽の伴奏によって上映されていた時代のことから、スローテンポのまだるっこさは免がれませんが、当時としては剣劇映画に馴か抵抗した作品であったかと思います。

製作には、夜間撮影ばかりで約一ヶ月かかっています。当時の撮影所は太陽光線を利用したグラス・ステージで、夜にならなければライトを使用しての撮影は出来なかった。そのライトの数も小なく、配光には色々の苦勞が伴ったものです。夜、ステージの中が暗くなるのを待って撮影をはじめ、朝太陽が出ると終了と言う、現在では想像の及ばない状況の撮影でした。

その「十字路」が32年ぶりでロンドンから再び日本へ帰って来たことに就きましては、色々な経緯があります。

私は昭和3年に、この「十字路」を持ってドイツに行きました。それはヨーロッパでの評価を知りたかったことと、同時にこの映画の上映収益金で、一日も長く滞在して映画の勉強がしたかったのです。丁度、ドイツではフリッツ・ラングが「月世界の女」を、バプストが「パンドラの函」を、フランスでは、カール・ドライエルが「ジャンダーク」を、ソビエトでは、エイゼンシュタインが「全線」を、ブドフキンが「アジアの嵐」を撮影している時期でした。恐らく「十字路」は日本映画がヨーロッパで上映された最初ではないかと思われませんが、それだけに馴染がなく、また各国共トーキーの試作に手をつけはじめた時なので、見るのに随分苦勞したものです。トーキーと言って

も、まだ画面の真中にテーブルを置いて、登場人物が掛合い漫才をやる程度のものでしたが、これが成功すれば映画が飛躍的に転換する大事な瀬戸際なので、見たこともない無名の日本の映画など、観る気持は起らなかったのでしょう。

ところが根気よくフィルムを持って廻っている中にやっとタウエンチン・ストラッセにある二階の小映画館、タウエンチンバラストで上映してくれる話がまともりました。その館は、翌月あたりから建物全部がデパートに改造されることになっており、その最後を飾る興行に、珍らしい日本映画を上映しようと言うので、「十字路」を検閲に出し、館の上映準備も全く出来た頃になって、当時ドイツの左翼演劇の演出家、ピスカトル夫妻が試写を見て、館の最後の記念興行にはふさわしくないと行って反対をしました。夫妻が演劇と同様、客席の一番前でスクリーンを見上げていたのは驚きました。理由は判らなかつたが、有力な演出家の反対で兎に角上映は駄目になりました。上映の見透しがつかなくなったので、代理業者の手を経て既に検閲の手続はしてあったものの、金もかかるので一時はとり止めようとした。然し思い切って検閲を受けたところ、思いがけなく検閲官から「十字路」は立派な芸術映画であると絶賛され、噂は配給業者の中にひろまり、検閲の代理業者は自分の手で配給したいと申込んで来ました。当時のドイツは文化助成政策をとっていたので、芸術映画のスタンプを貰えば、興行税などが半減されるからです。私は日本から「十字路」のネガティブを急送させ、ベルリンのガイヤー現像所へ依頼して、外国語版を作った。そして後日「最後の中隊」などを封切したノーレンドルフプラッツの映画館で、試写会を開きましたが、その時の伴奏音楽の素晴らしさは、未だに忘れ難い程のものです。それは、日本、朝鮮、中国、印度等々の東洋を混然と音楽化した、一大オーケストラで、映画の中の人物の心理、アクションにつけて、劇の雰囲気や強調した見事な演奏でした。

そのおかげで、翌日のベルリンの30有余の新聞は、「日本人のみの手によって作られた芸術映画」と言う見出しで、筆を揃えて褒め、ライト不足の為、セットを一色にした画調の単純さを、日本画の墨絵の如しと善意に賞讃したり、厳冬二月の撮影で気にし乍らも消すことの出来なかった人物の息を、姉弟の貧しさを強調する立派な表現だと言ったり、夜しか撮影出来なかったグラス・ステージの貧弱さを、オープンにセットを組んで息を出したものと解釈して激賞したり——。その反響で、ドイツはもとより、イギリス、アメリカ、フランス（これはパリで別のプリントを以って上映済）、イタリー、ノールウェイ、スイス、スエーデン（これは人物が血を流す場面があると言う理由で返品）その他の国々へプリントを出す結果となりました。

昨年（1959年）カンヌの映画祭へ行った折に、私は、川喜多かしこさんと一緒に、ロンドンのナショナル・フィルム・アチーブ（映画研究所）に行き、30年ぶりで、保存されていた「十字路」をムビオラで見せて貰いました。疵一つなく、丁寧に保存されていました。

その折の話で、日本にないこの映画を、東京の近代美術館のフィルム・ライブラリーに保存する為に、新しくデュープネガを起して貰うことになり、その交換として、溝口氏の「山椒太夫」のニュープリントを、大映の永田社長の御厚意で、無償で提供して頂いてロンドンにこれを送り、32年ぶりで「十字路」が日本へ帰って来た次第です。

それにつけても、将来の為に、古い映画が保存されると言うことは大きな意義のあることで、いい映画や、歴史的に必要な物が長く保存される運動が、一日も早く実を結ぶことを切望してやみません。

尚、登場人物に、オキタ、リキヤ、オウメ、と言う名前がつけられているのは、翻訳された時に便宜的につけたもので、原作では、姉、弟、女となっていたことを附け加えておきます。（1960・9・12）

「十字路」について

岩 崎 昶

1 「十字路」は「羅生門」以前の 日本映画を代表していた

もう三、四年前になる。世界卓球大会が日本で開かれたとき、世界卓球連盟の会長であるアイヴァー・モンタギュー氏が来日した。モンタギュー氏はかつて卓球の選手でもあったが、それ以上に、エイゼンシュタインの協力者として、また彼の論文の英訳者として、さらにはアルフレッド・ヒッチコックのイギリス時代のプロデューサーとして、その他要するに多面的な活動をした映画人として国際的に有名だった。そこで日本の映画人もモンタギュー氏をかこんで一夕の会をひらいた。その席上、モンタギュー氏が行ったテーブル・スピーチを私は忘れない。

氏はいった。

戦後まずイタリー映画がそのネオリアリズムで世界をリードした。そして、その次には日本の映画芸術がこれのあとをついで世界をおどろかした。「羅生門」を見る前に、私は日本映画をただ一本見た記憶がある。それは戦前も古いことであるが、ロンドンで「十字路」を見た。日本大使館主催の映学会であったが、この時伴奏をひきうけたイギリス人の楽団は、あいにく日本の曲の楽譜を持っていなかった。ロンドン中さがしたがない。そこで唯一つ楽譜のあった「君が代」を、トップタイトルからエンドマークまで、いろいろ苦労してテンポをかえながら、演奏していた。ちょうど秩父宮がロンドンに来ていてこの会に出席していたが、このプリンスは、なにぶんにも映画のあいた中、国歌が奏されているわけなので、起立すべきか起立せざるべきか、ハムレットのように、なやんでいた。

氏の話を書いて、私たちは大いに笑った。

これでもわかるように、黒沢明の「羅生門」がグランプリをとり、世界中で見られるようになるまでは、ヨーロッパ人の目には、衣笠貞之助の「十字路」が唯一の日本映画であった。ポール・ローサ、ロージャー・マンヴェル共編の「ムーヴィー・パレード」でも、そのほかドイツ、フランスあたりの映画書でも、日本映画といえば「十字路」のステルがただ一枚入っていた。「ヨシワラの蔭にて」という題名であった。

日本にはまったくなくなってしまったプリントが、イギリスのフィルム・ライブラリーに残っていたという事実を考えただけでも、「十字路」のヨーロッパにおける高い評価がわかる。

2 無声映画の典型としての 「十字路」

「十字路」は1928年に作られている。衣笠貞之助はその頃のまさに「ヌーヴェル・ヴァーグ」であった。2年前に独立プロを起して、当時の文壇での新しき波であった横光利一、川端康成などと手を握って「狂った一頁」を作り、これは「十字路」以上の野心作であり、傑作であった。

いまの若い観客諸君はこの映画ではじめてサイレント映画というものにお目にかかる人が多いであろう。そして、サイレント映画とはどのようなものであったかを知るには「十字路」はまさにうってつけの作品である。

いま「十字路」を見ると、32年前のこの映画が、音が出ないというために、ずいぶん不自由をしているので、もどかしい感じがする。トーキーのありがたさがよくわかる。が、その一面、ドイツの表現派やそこから発展していった「最後の人」などの影響を強く受けながら、日本映画が、視覚的な芸術としてようやく完生しつつある若々しい姿が手にとるようにここから見えてとれる。音もことばもなかった時に、映画は何をもって自分のいいたいことをいったかがわかる。そし

て、それは今日のトーキー芸術のためにもいい反省の材料を提供する。衣笠貞之助の先駆的な実験的な仕事の意味そのものは、あの時代との関連をうばわれた今の観客の眼には十分にはわからないかもしれない。が、その感銘はそして暗示や教訓は失われない。

いま久しぶりで「十字路」を見て、私は衣笠貞之助がこの後日本ではじめてトーキーとよぶにあたいするすぐれた「忠臣蔵」（1932年）をとることができたのはけっして偶然でなかったことを今さらのように感じた。

（9月21日午後5時半から朝日講堂における「日本映画の歩みをみる会」および10月2、5、9、12、16、19、23、26、30日の11回、毎回2時から国立近代美術館で上映）

国立近代美術館フィルム・ライブラリー